

第Ⅱ章 調査経過

1 調査概要

今回の報告は平城宮第48次調査（1968年5月23日～同年10月3日）としておこなった推定第二次朝堂院地域の東朝集殿遺構の下層からみつかった古墳時代の大溝と溝内堆積の一括遺物を取り上げ、さらに、平城宮第101次調査（1977年1月7日～同年3月25日）としておこなった第一次大極殿院西方にある佐紀池の池底から検出された古墳時代溝とその遺物を取り上げたものである。

第48次調査の発掘地は平城宮東半部の中心を占める第二次朝堂院の南端にあたる。第二次朝堂院地域は周囲を築地と回廊でかこまれた南北420m、東西190mの南北に長い長方形区画をなしており、北は大極殿回廊に接し、南は宮の南面東門の北側に門を開く。朝堂院地域は築地によって南北二つに区切られており、北側には十二堂の殿舎を配し、南側は朝集殿を東西に対置させている。この推定第二次朝堂院地域は大正11年に史跡として指定され、土地は当時の内務省に寄託されたという経過があり、翌年には整備が行われた。現在、朝堂院外周をめぐる石組溝がその時の施設である。昭和37年の近鉄車庫新設問題に端を発した平城宮の保存と国庫買上げの経過については既知のとおりであるが、史跡地の買上げが進行するなかで、宮跡整備がはじまり、まず宮の中心部である推定第二次大極殿、朝堂院地域の整備事業が昭和38年から奈良県によって開始されることになった。この一連の整備事業に伴って、朝集殿一画の遺構を明らかにする必要性から第48次発掘調査が計画された。一方、昭和42年から奈良県教育委員会文化財保存課による唐招提寺講堂の修理工事が進行中であった。同講堂は『招提寺建立縁起』（醍醐寺本『諸寺縁起集』所収）に平城宮朝集殿を移建したことが記され、また墓股の旧番付によって本来はこの建物が西を正面にした南北棟建物、すなわち東朝集殿であったことを知るのである。工事では講堂建物を解体し、基壇遺構を露出する予定であったため、両遺構を比較するまたとない好機であることから、東朝集殿の調査となったのである。第48次調査として実施した東朝集殿地域を当研究所の遺跡表示法にしたがってあらわすと、6AAW区A地区、6AAX区A地区に相当する。この位置は平城宮のなかでもやや高所を占め、宮の北に接してある奈良山丘陵が南に舌状に張り出した末端部にある。平城宮の造営に伴って丘陵は削平され、北から南に緩く下降する平坦地に整えられているが、朝堂院地域のみは周囲に比べてやや高く、旧地形をより多く残した状況にある。

大溝の検出

古墳時代遺構検出のきっかけは東朝集殿¹⁾の基壇規模が判明し、さらに基壇造成過程を精査す

- 1) 朝集殿基壇規模は東西18m、南北38.5mあり、基壇上面はすでに削平が著しいが、基壇周囲には凝灰岩切石片が多数遺存し、一部には据え付け痕跡が認められた。基壇の東・西辺には各3箇所階段痕跡があった。基壇の大きさから桁行9間、梁行4間の切妻造建物が想定でき、唐招提寺講堂の前身建物とよく一致することが明らかになった。『年報1969』pp.38-40。

1 調査概要

る過程で土層観察用畦畔に沿って掘り下げたところ、基壇下に古い流路の一部があらわれ、溝中には古墳時代遺物が大量に含まれていることがわかった。このため、部分的な断面調査を進めた結果、大溝 SD6030 は発掘区の北西端にあらわれ、S字状に曲折して朝集殿基壇下を通過して発掘区南東外へ延びており、溝の堆積層には多量の遺物を含んでいることが確認された。ただ、基壇下にあることから大溝の検出は基壇外に限っておこなうこととし、C区以南の18m間とK区以北の21m間の計39mについて遺構検出をおこない、両発掘区の間については観察用畦畔によって流路の位置と幅の確認にとどめることにしたのである。大溝 SD6030 の堆積は大まかにみて上、中、下の3層に分かれ、上層は包含する遺物は少なく、中層からは土師器、須恵器、埴輪が出土し、下層からは土師器と多量の木製遺物が出土した。また、SD6030 の東方で、築地 SA5985 基壇東肩に埴輪円筒棺が検出された。墓壙の上半は築地整地によって既に削平されていたが、棺に使用した円筒埴輪の遺存状況は良好であった。

埴輪円筒棺

このように生活遺物を多量に包含する溝と墓壙の検出によって朝堂院地域には丘陵の高台に



Fig. 1 調査位置図

第Ⅱ章 調査経過

占地した古墳時代の集落が存在していたと推測され、平城宮以前の土地利用の一端を知ることができたのである。

つぎに第101次調査地である佐紀池は特別史跡平城宮跡内にあり、佐紀中町と佐紀西町との間に位置する。遺跡表示法にしたがうと6ACA区W・S地区及び6ACB区となる。佐紀池については明治17年に一条通り沿いに築堤をおこなって、背後の狭い谷筋に湛水した灌漑用溜池である。また、佐紀池の北側の御前池、下吉田池、上吉田池については北浦定政の『平城大内敷地図』(文久元年・1861)に三つの池が示されており、享保元年(1724)の『五ヶ村絵図』¹⁾にも三つの池が記されている。このことから佐紀池を除く池は18世紀初頭に遡るもののようである。

また、御前池のほぼ中央付近を宮の北限線が通るが、渇水期には南岸寄りに礎石列を見ることができた。²⁾このように佐紀池や御前池はともにその成立が比較的新しいために、景観的にも平城宮と直接関連して結びつけることが少なかった。しかし、昭和49年度には佐紀池の南3分の2が国有地となり、昭和51年に第二次内裏地域を主とした宮内整備地への渇水用水源として利用することになり、揚水ポンプと濾過装置を池尻の一条通り南側に設置することになった。同年、第92次調査として予定地を調査したところ、奈良時代の池岸を検出し、池中の堆積層からは奈良時代の土器と木簡が出土したために、佐紀池の前身は平城宮の園池であった可能性がでてきたのである。そして同年には池の北側の3分の1を埋め立てて市立幼稚園運動場が計画されることになった。このために池の渇水をまって翌52年1月に第101次調査として池底に調査区を設定した。調査は池の北端で堤防下に沿って東西67m、南北15mのトレンチとこの南東方に南北26m、東西6mのトレンチを設けておこなったところ、両発掘区からは拳大の礫を敷きつめた池の汀線があらわれ、現在の池の東岸と近似した屈曲を示しながら連続していることがわかり、池底からは奈良時代の土師器と瓦、9世紀中頃の土器が出土したことから、池SG8500が平城宮の園池であることが明らかになった。古墳時代の遺構は園池の堆積層を除去した地山面で検出し、北発掘区の東寄りに2条の溝が確認された。うち1条は蛇行、分流しながら北から南へ流れる幅3m程、深さ0.6mの規模で、分流点には矢板を打って堰を設けている。他の1条は西南方から前者の溝に注ぎ込む幅1.5m、深さ0.5mの断面V字形の溝で、合流点には同様に堰がある。両溝からは古墳時代の土師器、木製農具、小銅鏡が出土し、池底のバラス層からは縄文時代中期の土器片が出土している。このような溝、堰、農具等の存在から本地域周辺は少なくとも古墳時代に谷筋を利用した水田耕作がおこなわれていたことを示すものであり、沖積平野に面した朝集殿下層の遺構とともに平城宮造営以前の土地利用の一端を知る重要な資料が得られたことになろう。

調査次数	調査区・地区名	調査期間	調査面積
48次	6AAW-B 第2次朝堂院 6AAX-A 東朝集殿	1968. 5.23~10.3	19.8a
101次	6ACA-WS 6ACB	1977. 1. 7~3.25	12.94a

Tab. 1 調査期間と調査面積

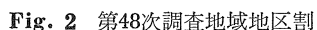
1) 奈良県立図書館蔵。

2) 現在は平城宮覆屋の前庭に移動、展示している。

3) 第92次調査については『年報1975』p.18参照。

1968年5月23日~10月3日

8・19 発掘区南端からAU区までの3区間の黒色粘土層（Ⅰ黒）を掘り下げる。木製品をはじめ埴輪片・土器などを多量にとり上げる。黒色粘土とⅡ黒に介在する褐色砂層を認める。溝の北限確認のため発掘区西北隅のBO・Q16区にトレンチ設定。



第Ⅱ章 調査経過

8・20 A区の遺物出土状況写真撮影準備。西北隅部分での溝肩検出に苦勞する。

8・21 BK14～16区に東西トレンチを設ける。A区Ⅰ黒層の遺物とりあげを終了、Ⅱ黒層を掘り始める。Ⅱ黒層は西にのみ厚く、東半部では極めて薄い。はじめて須恵器を褐色砂層から検出する。

8・22 A区AR06のⅡ黒層の掘り下げおよび南壁付近の断面観察用畦畔を除去。B区Rラインの黒色粘土層（Ⅰ黒）の下に青灰色砂層（Ⅱ砂）が土師器・木材片を多量に包含することを確認。

8・23 A区Ⅱ黒層下半はほとんど遺物なく、植物繊維が層状をなしてあり、Ⅱ砂（褐色砂）中の遺物とり上げを終了。B地区トレンチ内に溝東肩検出。南への延長上のA区にトレンチを設けるが溝痕跡見あらず、BL付近で東に曲折するものとみられる。

8・24 A区Ⅲ砂層を発掘。ハンゴなど大型部材が出土。B区Gライン南西セクション西半部を再検討するが溝は及んでいないことを確認。

8・26 A区Ⅲ砂層より鋤未製品等出土。

8・30 A区、BCラインまでの区間のⅢ砂層の調査継続。出土遺物少ない。B区、Lラインから北側の3区間を拡張し、黄褐色土（整地層）を除去、土師器少量出土。東肩を確認するが、北側では不明確。新旧溝の把握困難。

8・31 A区、Ⅲ砂（褐色細砂）の下に薄い有機質堆積層（Ⅳ黒）があり、木質遺物のみ若干出土。Ⅳ砂（褐色粗砂・細礫まじり）からは土器・木器が出土。一部溝底を確認。B区 溝上面の検出作業継続、地山面で溝肩の形状がほぼ明確になる。

9・2 A区、Aライン以南で掘り残しのⅡ黒・Ⅲ砂層を掘り下げる。遺物は比較的少なくⅢ砂直上より大型木材が出土。Bラインより北はⅢ砂、Ⅲ黒、Ⅳ砂の各層を下げる。最下層Ⅳ砂は粗砂を含み遺物は少ない。B区では流れが一時変っていることを確認。Ⅰ黒層中よりS字口縁甕出土。Ⅰ黒の下は僅かに細砂のパラツキあり、砂まじりの黒色粘土に続く（Ⅱ黒）。さらにその下は粘質の強い灰黒色土となる。

9・3 A地区Ⅱ黒・Ⅲ砂層よりの遺物とり上げ。B区全面的にⅠ黒層を除去。土師器を多量に含む。

木製品も少量ながら出土。一部Ⅱ砂・Ⅱ黒層に進む。Ⅲ砂（A地区のⅣ砂に相当）は褐色粗砂層で案・鋤・鋳等出土。

9・4 A区、発掘区南壁付近未掘部分のⅡ黒の一部、Ⅲ・Ⅳ砂層を掘り下げる。Ⅲ・Ⅳ層には遺物少なく、木片と土器小片若干を出土したのみ。南壁近くのⅡ黒層には多数の木材、木製品が入り乱れて堆積、土師器も多数混じる。うち高杯の数が目立つ。B区、Ⅲ砂、Ⅳ砂層を除去。Jより北について西方に発掘区を拡張し両肩を追求。最下層のⅣ砂とするバラス層は溝堆積層か否か未確認。

9・5 溝セクション、A区Cライン、B区L・Rラインの実測。

9・6 A区溝の実測。

9・7 A区南壁部分溝セクションの検討、溝底の確認。溝底から下には全体に20cm厚の自然堆積層があり、樹木の枝などを含む。B区・Lラインセクション畦に沿って古墳時代の面まで掘り下げ、溝の範囲を確認する。

9・9 B区、O～QのⅠ黒・Ⅰ砂・Ⅱ砂を順次下げる。Ⅰ黒層は他に比べて薄い。Ⅱ砂の下はバラス土に続く。出土遺物は少ない。

K～L区セクション畦の掘り残しの部分の発掘を継続。Ⅰ黒層をほぼ完了。Ⅱ砂を一部あらわす。Ⅲ砂直上で木製遺物が少し出土。溝岸付近でⅢ黒を確認する。

9・10 B地区セクション畦部分の発掘継続、Ⅳ砂直上まで下げる。Ⅲ黒は溜りの部分と溝の曲折点にのみ存在し全面にはわたらないことがわかる。厚いⅢ砂がⅢ黒の堆積を押し流した結果とみられる。BL区Ⅲ砂から小型丸底壺出土。以北の流路がほぼ明確になる。

9・11 B区溝肩をすべて確認し、流路を完掘するとともに平面図を作製。Lラインセクション畦に一部現われていた板材をとり出す。長さ1.36m、加工はとくにない。同時に木製鋤1点が出土。

9・12 清掃後写真撮影。

9・17 溝調査終了。埋戻し作業開始。

10・1 埋戻し終了。

10・2 発掘器材撤収。

10・3 発掘調査終了。

第101次発掘調査日誌

6ACA—S・W地区、(6ACB地区は省略)

1977年1月7日～1978年4月12日

1・7 調査開始。

1・8～20 池底の泥湿地を乾かすために調査地周囲に排水溝を設ける。

1・22 W地区に発掘区設定。

1・24～31 沈泥土と褐色砂土を排除。W65区以西では赤黄色の地山を確認し、小穴数個を検出。

2・1 58～62区で地山面に連続する灰白色粘土層上面で遺構検出作業。55区以東では沈泥層及び腐植土を排除し黒色土あらわれる。

2・2 灰白色粘土層上面には遺構がないことを確認し、掘り下げ開始。63区・64区にかけて土器、埴輪片少量、木簡（墨書なし）1点、墨書土器、瓦片が出土する。

2・3 西半の灰白色粘土層排除。遺物なし。東半部は植物腐植層を掘り下げる。

2・4 WB57・WC56区に斜行する古墳時代溝SD8521を検出。WD56区でしがらみの倒杭あり、撮影後取上げる。WS54区の黒色土層より庄内期土器と木器出土。SD8521東岸がS地区へ延びていることがわかったために溝の掘り下げは一時中止する。

2・5 S地区の調査開始。水田耕土から掘りはじめる。

2・7 58ラインの土層観察畦を撤去開始。S地区東半傾斜部分では青灰色砂質地山がテラス状の段をなして下降することを確認。

2・8 58ライン畦畔部分、最下層の植物腐植層に達し、若干の木器と木片が出土。

2・9～15 S地区、池の東岸沿いに掘り下げる。

2・16 S地区西半部で植物腐植層に達する。

2・17 S地区遺構検出。青灰色粘土の地山を追って下降。地山は赤褐色粗砂層に交替する部分もあり。49ライン以西にはじまる植物腐植層から瓦、土器、木製品が出土。北半のG53～F52で多い。なお、EF51を中心にSD8520堆積層と同じ黒色粘土層の広がりに達する。範囲を確認して作業を行う。

2・18～23 奈良時代の池の汀線を検出。

2・24 奈良時代の遺構写真撮影準備。

2・25 奈良時代の遺構写真撮影後、古墳時代溝掘り下げ開始。

2・26 SD8520堆積層掘り下げ。黒色粘土層下に砂層の間層があり、さらに堆積層が続く模様であるが、砂層まで下げる。キヌタ、ナスビ形鋤等が出土。

2・28 E54～55区では溝幅が広がり、遺物量が増す。WD55区に台状板製品の他に自然木が多量にあらわれたために、清掃し出土状況の写真撮影を行う。

3・1 E54区で東岸が直角に折れて東へ分流していることが判明。分流点に堰があらわれる。D56にも堰SX8523があらわれ、SD8520に注ぎ込む別の溝SD8521の存在がはっきりになる。出土状況の写真撮影。SH57区を北へ拡張。

3・2 全景写真撮影のため清掃にかかる。

3・7 写真撮影。実測準備

3・11 実測終了。

3・12 現地説明会開催。

3・14 調査再開。木製品等を取り上げつつ、下層の砂質層に達す。木製品遺物は少なくなり、布留式土器が主体となる。SD8520の南端でBC52・53区南壁沿いに断ち割り、溝底の状況を確認する。

3・15 SD8520北端のWG55で鋤出土。53区南壁トレンチ、池底より1.5 m下げるもバラス層より縄文式土器4片出土。

3・16 SD8520の両肩を確認しつつ底を浚える。

3・17 清掃後、完掘状況の写真撮影。

3・18 実測。

3・19 実測、古墳時代遺構を残して埋戻し開始。

3・22 木製品取り上げ。

3・23 台状板製品の下から素文鏡が出土。

3・24 実測終了。埋戻し開始。

3・25～4・11 埋戻し継続。

4・12 埋戻し終了。

4・15 佐紀池の樋口を閉めて湛水をはじめる。

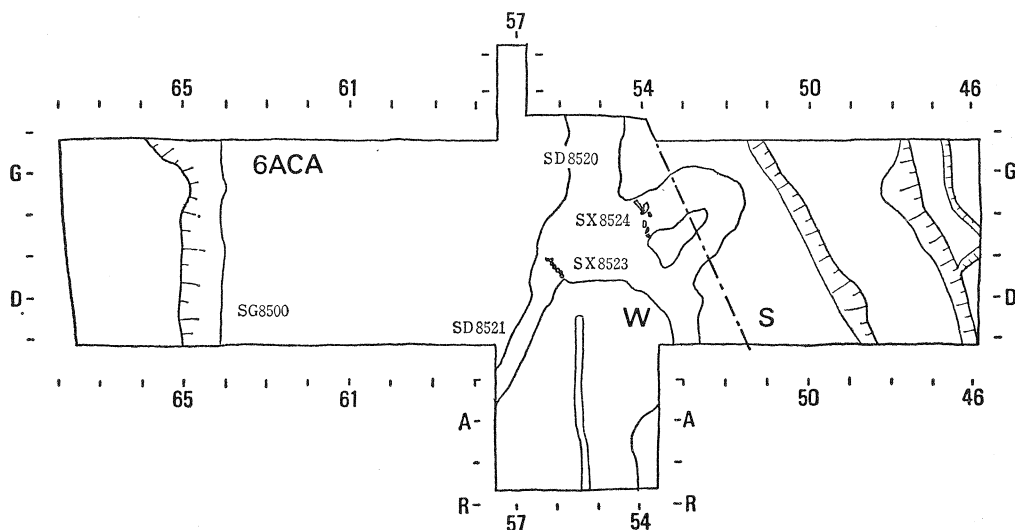


Fig. 3 第101次調査地域地区割